

『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』という文学研究

山路敦史

の意味しかない。『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』は、従来の〈郊外〉言説への安易な同一化や代替案の実体化を拒む地点に立脚している映画なのだ。

とはいえ、秋山駿の命日が富井法子の母の命日が重なることを頂点として、法子の交通事故と松本清張作品など、この映画にも“死”のイメージが偏在している。だがそれは、この映画を単一な結論へと導くのではなく、むしろこの映画それ自体を複数化の契機へ導くためにこそ存在している。“ii”推理小説の死体現場”で、学生たちが清張作品の事件現場を再現するのは、謎解きが目的なのではない。一人の学生が言及したように、犯人特定や事件解決などの謎解きを主眼とする推理小説にあって、死者は死者であることのみ物語に奉仕し、死それ自体の意味は問われない。清張作品を読み込み、現場を再現した上で死について語ることは、作品の表層からは排除された声を創造することである。学生たちの生き方とむすびついたそれぞれに固有の清張作品読解であり、作品のヴァリアントを生成する試みなのだ。

物語は、すべての文学踏査に同行した法子の書く行為へと物語的には収束に向かう。随所に挿入されるノートの頁をめくる音は、法子が現在進行形で『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』を書いていることを想像させもする。いずれにせよ書くという行為の痕跡がちりばめられた映画である。法子が喫茶店でレポート用紙に消しゴムをかけているシーンがある。結末では法子のノ

『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』は、〈西東京〉と文学（者）とのかわりを研究する大学生たちを記録した五つのドキュメンタリー・パートと、メンバーの一人の女子学生・富井法子に焦点を当てて展開するフィクション・パートにゆるやかな連続性をつけることで、現実と虚構のあいだの、より高次元な意味内容の実現が目指されている。

“iii”「水の塔」の弾痕”での、歴史的・文化的にまったく異質な「水の塔」と「原爆ドーム」の相同性がふいに見出されたことは、田無神社の「どんど焼きの穴」から法子が「井戸」の記憶を想起したことに接続される。物語内のモノとモノあるいはフィクションとドキュメンタリーなど、この映画の関連づけの想像力は、「西東京と紡ぐ文学」とも相似形をなす。このような読みのコードを採用してはじめて、文学史的にはまったく関連が指摘されてこなかった文学（者）の異質な言葉同士が出会う極めて生産的な場は出現するのだ。五木寛之と田無神社の関連を実証した“i”田無神社の看板”で、田無神社に新たに設置された看板は、田無神社という場の記憶をも書き換えた。それは単純にかつてあった看板を元通りにしたわけではない。かつて看板が存在し、苦情で一度は撤去された後に、あらためて正確な調査に基づいて論証され、新しく看板が設置されたという歴史が孕まれた言葉なのだ。看板の表層からは抹消されてしまうような歴史的な厚みは、五木作品や学生たちによる複数の言葉が内包された

ことも含め、ドキュメンタリーという形態をとることによって、たしかに刻まれている。

“iv”藤村女子の校歌”では、歌詞に学校名を記載するか否かをめぐる茨木のり子の「校歌」というジャンルへの認識と葛藤の歴史が明らかにされたことで、観客は校歌を複数化の可能性が孕まれたものとして聴くことになる。学校名という形で際立たせられた“名前”が、直後に作中で唯一、法子が名前を呼びかけられることによって、「のり子」から「法子」、そしてもう一人の「法子」へとゆるやかにつながり、この映画は書くことの主題化を徹底していく。

“v”ひばりが丘団地のご飯”は、妻・秋山法子の証言と手帳の書き込みが、「簡単な生活」を標榜した秋山駿（像）の書き換えにつながる。秋山駿が手帳に書き残した“法”と“痛”の二文字は、最終的には「法子の、痛みが、痛い」という形をなすが、そうした解釈に至るまでには“法 痛”↓“法子、痛い。”↓“法子が、痛い。”↓“法子の、痛みが、痛い。”という複数の読解の過程がある。こうした過程への焦点化は、「西東京と文学」を映画において複数化して示しようとする戦略と深く結びつく。たとえば〈郊外〉は、“死”のイメージで語られることもあるが、もはやステレオタイプ化している。法子が撮影現場の下見に訪れる冒頭のシーンでは、〈西東京〉のガード下のトンネルに大きく“死”というラクガキが映り込む。〈西東京〉を〈郊外〉や“死”のイメージで染め上げることは陳腐かつ退屈であり、ラクガキ程度

トの脇には鉛筆とともに消しゴムが置かれている。これらで示されているのは、消すこととは、書くことの一部ということだ。すなわち書くことは、スラスラとした単線的な行為ではありえない。書く過程には、常に矛盾や葛藤がつきまとい、それ自体複数化の可能性が孕まれている。

『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』の物語は、カメラマンである女子学生が、文学（研究）を通じて、生き方にもかわるような認識の変容があり、それらを丸ごと「西東京と紡ぐ文学」という研究として書く行為へと結実させた、と概括できる。それらは法子の書くという行為に内在する様々な葛藤や矛盾、その過程において溢れ出た言葉たちそれぞれに価値を認めようとするものだ。

しかし、法子のみならず文学踏査を通じて学生たちが発してきた言葉や身体感覚は、法子の物語に奉仕しながらも、物語の過程のなかでしっかりと息づいている。この映画には、いつでもそれぞれの学生たちが書きはじめるかもしれない可能性が孕まれており、それはいつでも『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』のヴァリアントとなる。この映画は決して閉じられることのない不断の書き換えと複数化の可能性の途上のものとして成立しているのだ。

それはまた、『ウエスト・トゥキョウ・ストーリー』という文学研究として、〈西東京〉を文学とのかかわりにおいて安易に実体化せず、常に複数化の可能性を孕む豊かな思考の場として示していることを意味している。

山路敦史●1985年7月東京都生まれ。北海道大学大学院文学研究科映像・表現文化論専修博士課程在籍（2016年3月現在）。共著に『武蔵野文化を学ぶ人のために』（2014年、世界思想社）。論文に「坂口安吾「村のひと騒ぎ」論—「頭の悪い私」の射程をめくって」（『坂口安吾研究』2号、近刊）、「坂口安吾の「周章て者」再考—「風博士」論」（『日本近代文学会北海道支部会報』18号、2015年5月）などがある。